No. 171号
OB・Gニュース
二〇二十一年七月号
発行責任者
社民党がんばれOB・G福島の会
eメール huruya.michitatsu@orange.plala.or.jp

誰もが、政治を自分の生活に身近と感じている。今がチャンス!!

国会の討論を聴くたびに、首相をはじめとする各大臣、参考人として招致された官僚までもが、頻繁に使う「言い逃れ」や「同じ回答の繰り返し」、はては「記憶にありません」、「答える立場にはありません」の言葉の乱発のオンパレードの姿勢が続く。

かつての安倍内閣の国会審議を「ごはん論法」ととらえた。つまり「ごはんを食べましたか」の質問に対し「(コメの)ご飯は食べていません」と答える手法である。内閣の主人公が変わり菅政権となった。その菅政権は「ヤギさん答弁」を繰り返す。

「しろやぎさんからお手紙ついた。くろやぎさんたらよまずにたべた……」。国会の菅首相の答弁は「質問を読まずに食べちゃった」と。

ごはん論法を広めた上西充子・法政大教授は『やぎさん答弁』から菅首相の言葉の本質が見えてくる」と語る。

いわゆる質問にはまともに回答をしない。説明をしないという態度である。

国の最高機関である国会の権威は何処にいったのであろうかと、いつも思う。そして費やされる「論議時間」を無駄に過ごしているばかりか、国費の浪費であるとさえ言いたい。

そこに、自民党一強政治の本性が見える。

例えば予算委員会の中継で自民党席に座る多数の議員を見る。彼らからは野党の質問には無関心、しかもまともに答えず、回答をすり替える首相をはじめとする政府・官僚の姿勢に対して眉をひそめるなどの光景を見ることはない。そのように、何の反応も示さない自民党議員には、市民感覚からしても強い不信と不満を持つ。「この国には議会民主主義」がないのかとの疑念である。

同時に、質問に立つ野党についても疑問を持つ。それぞれが党を代表しての質問席に立つのだが、各野党もまた同様の質問を繰り返す。それに対し答える側も同じ回答を続ける。それでは政府の「のど元」を突き刺し、立ち往生させる場面を生むことができないと思うが、どうだろうか。

勿論、野党自身も自らの党の方針もあり、そして存在を示そうとするのであろうが、国会を「お喋りの場にしてほしくない」ということである。

きめ細かな「院内共闘」の準備を求める

野党は、院内共闘をもってこれら反動的ともいえる政府、与党の姿勢に立ち向かう必要があるのではないか。例えば、野党合同による官僚とのヒヤリングの実施。各党(議員)の調査、研究の公表と共有化。場合によっては「問答集の作成」するなど事前のすり合わせができないものであろうか。

とりわけ予算委員会は、国民が注目する討論の場である。政府・与党に胡坐をかかせてはいてはいけない。ましてや、審議をつかさどる委員長の多くは自民党議員である。国会中継でもよく見る場面であるが「その件については理事会で検討をする」との言葉で終わる。ではその理事会の審議の結果を、国民の前に明らかにされているだろうか。知る限りにおいては、その記憶は残念ながらない。

そして国会は終了をする。

今、変異株による国内感染の拡大は、第5波を予想するかのように広がろうとしている。ワクチン接種も一定の広がりを見せてはいるが、後れを取ったワクチン供給は未だに後遺症を残している。さらに病床の確保が困難という「医療ひっ迫」の中で自宅待機者の死亡も拡大をしている。

しかし、政府はなりふり構わず東京五輪の開催は強行しようとしている。今ほど政治が国民身近になっていること、そして誰もが自分の実生活に結び付いているときはないと受け止める。

「先の北海道、長野、広島補選の再選挙で野党が候補者の一本化を図ることに成功し勝利をした。野党が一本化すれば総選挙でも勝てる可能性が十分にあることを証明された。次期衆院選は、野党にとって自民一強の横暴を倒すチャンスと受け止める。

「支持政党なし党」が最大の野党である汚名を是非とも返上したい。

【視点】

象の群れから学ぶ「自助・共助・公助」

ワールドライフ「極上の大自然に招待」をタイトルにしたNHKのテレビ番組がある。その日の野生動物はアフリカ象の群れであった。象は、雌を中心に家族のつながりが強い動物と言われている。一時離れ離れになった弟や妹と出会うと鼻を絡めてすり寄り、連帯を深める光景を見る。

そしてその家族の群れは、リーダーの記憶をたどりながら「水場」を経由しながら数千キロ平方に及ぶ大移動を繰り返すが、その水場が干上がっているときがある。また「子づれ」である。その子象をライオンは狙う。そして、そのおこぼれにあずかろうとハイエナがまわりをうろつく。リーダーや成長をした家族がライオンを威嚇する。その中に老いた象がいた。それでも必死になって群れから離れまいとして頑張るが、そこをライオンが狙う。

やがて、その老いた象の限界を知ったとき群れは振り変えることなく離れていく。その後には厳しい自然界の掟が待っている。

象の生活に「自助・共助」という意識があるのか、どうかはわからない。しかし、見るもの(人間)にとっては、まず個体同士の頑張りがあり、同時に仲間が「守り合う」という姿は見て取れる。しかしそこには限界がある。共に行動をしてきた家族とは言えその時は見捨てる。厳しい野生の世界であるから当然であり、考えさせられる場面であった。

今、私が述べたいことは人間社会においては「公助」がある。それが動物とは違うところである。

よく「自助・共助・公助」が政治の場で語られる時は、決まって自助を強調する意味で使われる。それは自分の生活は、自分で何とかしろというメッセージとなり「公助を弱める」意味を持つ。

そこに登場をしたのが政治家菅義偉氏である。

「私は、秋田の農家の長男として生まれ、上京して町工場に就職。苦学して夜間大学へ、やがて市議から国政へ」。そして世襲議員が幅を利かせる永田町で「たたき上げの苦労人・政治家」を売りに政治の頂点に立った。そして「自分でできることは、まず自分でやる」という「自助」重視の姿勢を如実に出しているのを見る。

これに対し、立憲民主党の枝野代表は「自助努力を迫る自己責任論が強まる中で、追い込まれることは頼ることをためらう風潮が広がることである」と批判した。（2020年10月国会）

「8050問題」を政治課題の柱に!!

無年金の子と親の同居生活がある。やがて高齢化をした親の介護がその子どもの上に及ぶ。それでも無年金の子にとっては、その介護は「親の年金を受け取りつづける」ことを意味する。またその逆もある。「無年金の親と子どもの同居生活がある。そしてやがてくる親の介護は、子どもとその家族を含めた生活設計を脅かす。しかも「介護には期限がない。いつまで続くかその先も見えない」。

そして悲しいことであるが「ヤングケアラー」がある。慢性的な病気や障がい、精神的な問題などを抱える家族を、学業を犠牲にしても世話をしている18歳未満の子どもや若者のことである。

いわゆるこれら「8050問題」は叫ばれて久しい。加えてその深刻化がますます拡大をしている。そして、そこには「自助も共助も、ましてや『公助』はない」。

そして今般のコロナ禍を考える。日ごろ非正規労働という立場にあった多くの労働者。その多くは女性であり、とりわけ「一人親」の立場にあるのが女性の皆さんも多い。そして今、職場を失い子どもを抱えてぎりぎりの生活に強いられている。

その失業の実態は、リーマンショックを上回る517万人とも言われている。このような事態にある皆さんに「自助」を求めることができるだろうか。

災害などは消防、場合によって自衛隊と言った国の救援、支援がある。それは国、あるいは自治体の公助である。しかし破壊され、暮らしの中で苦しみ、悲しいことであるが「自死」に追い込められる国民への救済、支援の「社会保障」としての「公助」はますます重要な位置づけとなってはいない。

そこで、あらためて菅義偉首相に尋ねたい。「それでも日本人の現状は、公助に頼りすぎ怠けているという認識を持っているのか」と。

このコロナ禍の中で、無年金の子が看る親の介護をはじめ、「ヤングケアラー」の実態。そして職を失いギリギリの生活を強いられるひとり親とその子への「公助」の拡大、強化をあらためて人間として考えたい。

象の群れから学び取った教訓である。

【一寸ひとこと・気づいたこと、感じたこと】

スーパー化した「ドラックストアー」に驚く

「身体の障がい」は「加齢と共に訪れる」とは判っていても、いざ自身がケアーする立場にならないと実感できません。週2回の燃えるゴミには「（新聞紙にくるんだ）尿取りパットや介護パンツ」を出すことになりますがこれがけっこう重いのです。先日、「先輩」から『この地域の燃えるゴミの量が増えているようだ』と言われましたが、そりゃそうだ。高齢者施設は増えているし介護用品は欠かせない。蒸発散でもできれば軽くなるのかもしれませんが。その間臭いをどうするかです。今日も我が町には新しいドラッグストアー（チェーン店）がオープンしました。朝刊の「チラシ」を見てオドロキ。まるで「スーパー」のチラシです。各項目の中に申し訳程度に衛生医療関連商品がまざっている感じでした。これで市内（旧市街地で7店舗）の計9店舗です。ドラッグストアーの進出にはやはり「高齢化（社会）」が大きな要因です。定期的にそろえなければならない介護用品は必須ですから。

わずかの年金生活では、これらの「用品とデイサービス等」の料金を支払うには「足りない」のも実態です。こんな社会でいいはずがありません。

（喜多方・S・Y）

僅か12段の階段の、のぼりに一苦労

85歳の身。妻が洗濯機から持ち出した洗濯物を居間のテーブルでたたみ籠の中へ。その籠をもって二階のベランダまで運ぶのが私の役目である。ところが最近僅か12段の階段が大変になった。つまり両手で籠を抱えて、手すりを使わずに登ることが困難になった。

春になり一斉に草が生え茂る。猫の額ほどの庭だが、草むしりの姿は人には見せたくない。つまり「四つん這い」である。そして二日後になって「腰」にくる。その痛みがなかなか治らない。日曜日の夕方に放送されている『笑点』がある。その大喜利コーナーで出されたお題に18歳と81歳違いがある。

頓智の効いた回答を面々がしていたが、私も一つ捻ってみた。

痛みはすぐくるが、治りが早いのが18歳・
痛みは後からくるが、
なかなかおらないのが81歳

（老々世帯の身）

五輪の美名の裏に隠されたひずみについて

「東京五輪・パラリンピック大会組織委員会が全国の大会ボランティアに対し、ユニホームや身分証明書を関東や東北、北海道など開催地の公共施設まで取りに来るよう要請している。交通費は本人負担である」との記事を見る。

（東京新聞・5月20日）

五輪ボランティア　福島県内638人辞退

東京五輪・パラリンピック期間中に県内で活動する都市ボランティア（シティキャスト）が、大会延期前に決定していた福島県民千七百八十一人のうち35.8％に当たる六百三十八人が活動を辞退した。シティキャストは野球・ソフトボール競技の会場となる福島市の県営あづま球場や主要駅などに配置される。

（福島民報・6月3日）

勘違いをしていないか。危険は国内にあり

政府、あるいは組織委員会は、外国の選手団や関係者へのしっかりとした「コロナ感染対策」をすれば「安全五輪」は開催できると主張し、対策のメニューを揃えている。それにしてもそのメニューが完全に整えられる保証はない。よしんばそれが可能であったとしても、開催中の「スタジアム外での人流（人の流れ）の拡大となり、感染を一挙に拡大させ、その結果としての「リバウンド」（再拡大）を防ぐ保証がない」というのが「専門家」の見解である。そして政府、大会組織委員会は「有観客」で実施をするという。さらなる人出の増加は避けられない。大会組織委員会の試算によると、東京都内の競技会場を訪問する観客数は1日最大で22．5万名、ボランティアや警備員などを含めれば約30万人規模まで膨らむ」と試算をしている。

（毎日新聞・6月17日）

戦後のラジオ番組「君の名は」の時間帯は市内の銭湯が「がら空き」に。また力道山の試合には街中の電気屋さんの前には人だかりができたことを記憶している。人々の解放された思いは、東京都内はもちろんのこと、五輪開催中の街中のイベントへ。そしてなんとはなしの自由な外出、人との出会いは全国的に拡大をするだろう。そこに第三、第四を上回る第五の波を心配する。そのことは心配なしという根拠を政府は示して欲しい。（M・女）

【ニュースを読んで】

■北海道は連日、最多を更新していて、拡大に歯止めがかかりません。札幌は人口も200万人と多く、感染の速度は早いのに、ワクチン接種が大幅に遅れるという首都圏のような状況が続いています。この1か月がヤマで、ここで抑えられるかどうかが鍵になるのではないでしょうか。もっとも、これまでの役所仕事の非能率を見れば、あまり期待はもてそうにありません。先日、札幌の在宅医に取材しましたが、これまで入院していたお年寄りが、ご自宅に戻りたい、と言ってくる例が増えてきたそうです。入院すると、家族が面会できなくなるので、このまま離れているより、家族に看取られたいとおっしゃるのだそうです。お葬式もできないとか、骨上げもできない、といった話も耳にします。切ない話です。

■ニュース拝見しました。どこでもワクチン予約は大変ですね。しゃくですが、妻と妹について、自衛隊がやっている大手町合同庁舎の予約をしました。驚いたのですが、かなり余裕がありました。高齢者はネットが使えないということがよくわかりました。

■私たちの家族は、ネットで申し込みました。新型コロナウイルスワクチンの注射予約日は、7月11日です。受付の電話もつながらない。またネット環境のない人に、深谷市では地域の公民館で代行によるネットからの申込みができるようになり、受付の混乱もなかった模様です。近隣の市では、深谷市の公民館のようなサポートは無いようです。

■ニュースも今年の半分「コロナ」騒動で引きこもりが半年経過と言っても過言では無い気がします。今のところ大過なく過ごしています。毎日の散歩大いに結構です。免疫力を高めて下さい。小生夫婦も6月24日に一回目のワクチン予防接種を受ける予定です。何とか自己防衛を図りたいと思っています。オリ、パラもどうなる事やら、IOCのコマーシャルベースで進みそうです。

■ニュース受け取りました。コロナをめぐる動向の詳しい追及、訴えていることに敬意を表します。私も、5月10日受付開始ということで、今日まで電話をかけていますが、いつになるかわかりません。七月にとか、八月までとか、全く不確かなこと、日本の政局そのものです。喜多方の方の介護パンツやお店のこと、私も五月上旬までパンツを使っての母の介護を思い出しました。駅西口でも休みの土産店がでたとか。ニュースを身近に実感して読む昨今です。

■6月1日、郡山市内の「集団接種会場」で第一回のワクチン接種を受けました。65歳以上のいう年令制限でしたから「高齢者の集まり」です。妻に手を引かれている方、車いすの方、一人ですがシャンとしておられる方「人生いろいろ」であることを感じました。さらに、対応をされている医療従事者、とりわけ案内と事務手続きをされている方の手際よさと、丁寧な対応に感謝しました。

■ニュースの前半で菅首相の答弁について書かれていましたが、なぜこんなに聞くに耐えない、説得力のない言葉を平然と繰り返すのでしょうね？言葉が全く説得力をもって響くことがないのは「安倍政治」以降、菅政権もまた言葉を壊してきた結果だという気がします。壊した言葉、信頼性を失った言葉が、国民の心に届くはずがありません。結論のみを繰り返し強弁するだけで、根拠も過程も一切説明しない薄っぺらな言葉だけを聞かされ続けています。

■政権も官僚も平気で嘘をつき都合の悪いことを隠すようになりました。モリカケ、学術会議、検事長定年、選挙買収、東北新社・数えだしたらキリがありません。台湾のIT大臣のオードリー・タン氏は民主主義の基本として「透明性」と「多様性」をあげていました。国はデジタル改革関連法で個人情報の一元管理を目論んでいるようですが、それは「透明性：説明責任」が担保されることが大前提です。民主主義にとって、言葉、議論、透明性がいかに大切かを、政権、官僚が反面教師となって日々再確認させられている気がします。

【お詫びとお断り】

メールやお葉書で頂く寄稿は嬉しく拝見しております。そして「OB・Gニュース」が読者の皆さんとの繋がりの強まりを痛感しています。これも「継続の力」であり、それを支えて頂いた現地の担当者の努力によるものと感謝いたします。

また、字数の関係もあり一部省略をしておりますことお詫びをいたします。

（事務局）